

# 生徒自ら考え、決めていく



狙いを選手たちで決め、バッティング練習に励む兵庫教育大付属中の野球部

## 活動の 改革の いま

ガイドラインから2年

2

「生徒主体で活動する部」と聞き、兵庫県加東市の兵庫教育大付属中・軟式野球部を訪ねると、生徒たちはトスバッティングに取り組んでいた。外角に球を投げてもらう選手、片足をブロックに乗せる選手。監督の山本泰博教諭は目的だけを聞く。「外角を引っ張

る意識で」「体重移動をスムーズにするため」と個々が答え、自分たちで決めたメニューを消化していく。部員15人。部の運営は部室管理、試合準備など、全員が何かの責任を持つ「1人1役リーダー制」を採用する。それぞれが書く野球ノートも、ノートリーダーがまず目を通す。「同じ目線のチームメイトが読むことが前提なら『いい格好』ができず、まず自分を見つめるようになる」

柴崎宇楽主将は「とても頭を使うけど、楽しい。怒られてやるより、自分の成長を感じる」と話す。山本教諭が「生徒主体」を明確にしたのは、同校に赴任した2018年。1997年に朝来市の中学校で野球部顧問になると、猛練習を強いた。休日は朝から暗くなるまで。「暴力はなかったが、暴言はあった。3年目に県大会で3位になり、てんぐになった」

転勤先で「とんでもない教師がくる」という評判が立ち、部員が出て来ない。「何がダメなのか」を考え始めた。かつて広島観音高サッカー部を率いて全国優勝した畑喜美夫氏が提唱する選手主体の「ポトムアツプ式」の指導に出会い、実践に移した。

中高の部活動について、学習指導要領は「生徒の自主的、自発的な参加により行われる」と記す。だが、旧来、指導者が引っ張り、勝利に導こうとするスタイルが一般的だった。暴力的指導の背景ともなり、怖い指導者に従うだけの、意思決定ができない選手を育てる土壌にもなった。

そんな中、18年3月にスポーツ庁が定めたガイドラインでは、改めて自主・自発を重視すべき項目に挙げた。近年、その実践は草の根から湧き起こっている。甲府市の中高一貫の山梨英和剣道部は、代替わりする時、部の目標や顧問がどこまで関わるかなどを、部員と顧問が話し合う。剣道経験がある顧問の堀江なつ子教諭は助言する程度だ。

今年の目標は「きれいに決めて1回戦突破」に。前年は高校で団体戦を組める層があり、「得意技を磨いて1回戦突破」としたが、今年の高2、高1、中1の3人だけ。基本から始め、スムーズな体の動きで勝利をめざす方針にした。

生徒、顧問の両方が納得するプロセスが下地。堀江教諭が「生徒の発言権を強めることで、部活動の教育的な意味が高まる」と自治的なやり方を取り入れて、4代目になる。

前の代はドウが得意な生徒の特色を生かすべく、相手にメンを打ってこさせる間合いをみんなで研究した。実際に公式戦で、じわじわと距離を詰め、見事にドウを打ち抜いた。「結果が出るのが最終的な喜びではない。自分たちで考え、みんなで合意したことの実践が、社会に出て信頼されることにつながると思う」